

T 02
N 69
43

日本における統計学の発展

第 43 卷

話し手	鮫島	竜	行
聞き手	三猪	信	邦
	森	博	美
陪席	守岡		隆



昭和57年10月27日 (水)

於 日本統計協会

10/12
26031

26031

ま え が き

- 1) この速記録は、昭和55、56、57年度文部省科学研究費総合(A)によるもので、研究者は次の通りである。
江見康一、丘本正、大屋祐雪、坂元慶行*、鈴木雪夫、竹内清、西平重喜*(代表者)、野沢正徳、広田純*、藤本熙、松下嘉米男、松田芳郎*、三瀨信邦*、森博美*、山元周行 (* 推進係)
- 2) インタビューの聞き手としては、研究者以外の方々のご援助を得た。その方々のお名前は、別巻を参照のこと。
- 3) この速記録の原本は、統計数理研究所図書室に登録保管される。そのほか、話し手と聞き手及び関係の協同研究者が保存する。
- 4) この速記録の利用に制限はつけないが、話し手、聞き手、研究代表者または推進係と話し合った後にされるよう希望する。
- 5) 速記録を個人的に研究するため、コピーを希望する方は、代表者がコピーしやすい形で保管しているので、それを利用することができる。

以 上

三瀨 それでは鮫島先生のインタビューを始めたいと思います。

前にいただきました先生の履歴に大体沿った形で、やや時系列的に伺うわけですが、昭和10年に東大を卒業になったのですが、そのころの経済学や統計学の講義の先生とか、内容とか、そんなことをちょっと……

鮫島 そのころは、有沢先生だったのです。ほかに統計学の講座を担当されているのは、記憶していません。有沢先生だけだったような気がします。それで僕は、有沢先生のゼミに入っていたのです。有沢ゼミに集まった連中で、統計学を勉強しようという考えの人間は、どうも一人もいなかったのではないかと。みんな経済学をやりたいと思っていたようです。

われわれが演習に参加したのは、昭和7年なのです。昭和6年か5年ごろと記憶しますが、ちょうど有沢先生がドイツから日本に帰られて、『改造』か何かにたしか「軍需産業論」という論文を出されたのです。その論文がいままでああいう大雑誌ではなかった新しいスタイルを打ち出したのです。それは、世界経済の統計を使いまして、ある現実を実証するという、これは『統計集誌』なんかではしよっちゅうやっていることかもしれませんが、そういう統計数字を駆使した、非常に実証的な学問の態度がそれなんですね。そういうものに関心をもった連中が、集まったのじゃないかと思います。

三瀨 現状分析ですね。

鮫島 統計学の回帰方程式とか、やれ何とかというものを勉強しようという人はいなかったように思うし、僕も実はそうだったですね。統計学の講義は聞きましたけれ

ども、講義そのものは先生に申しわけないのですがあまり覚えていませんね。

三 猪 ノートですか、それとも……。

鮫 島 たしかノートでしたね。

先生は、演習のときに、那須皓先生の『日本農業論』という本を勉強するのだといわれるのです。那須皓先生の本は、かなり旧式な農業経済学でしょう。なぜこんなものをやるのだらうと僕はちよっと思ったのです。どうしてやるかは、そのときはわからなかった。しかし次の年に、先生は山田盛太郎さんの『日本資本主義分析』を取り上げられたのです。山田さんの理論は、日本農業を日本資本主義機構の基柢として捉えていますね。そういう関係で、農業というのを本格的に勉強しようと言われていたのではないか、あるいはそういうことから、演習生に農業について考えさせようと言われたのではないかと想像されます、その辺はよくはわかりませんが……。

ただ、演習の最初の集まりのときに、演習生が14～15名でしたが、鈴木鴻一郎君もいたのです。先生が「農業って何かね」と質問されるのです。みんなポカンとしていた。農業というのは、大根をつくったり田んぼを耕したりすることか、そういうのでは答えにならぬだらうと思って、黙っていたわけですから。すると先生は「農業は産業だよ」といわれたんです。なるほど、そういうものかと思って、産業という言葉が、その後非常に印象的に僕の頭の中にニびりつきました。「産業資本」とか何とか盛んにいっていましたから、産業という言葉はむろん知っていたわけですが、そのとき、もし「農業って何ですか、産業をして産業たらしめる本質は何ですか」と逆に

質問できたら、りっぱなものだったと思うのですが、そういうことは、ずっとのちになって統計局に来てから考えるようになったわけです。(笑)(拙稿(s)署名「職業・産業の分類原理」、『統計』1966年8月号所掲参照)。

僕は、大学では非常に怠け者で、講義にはあまり出なかったが、図書館にはよく行きました。ですから、僕の大学時代、カレッジライフで印象に残っているのは、有沢先生が演習生を引き連れて、本郷あたりの喫茶店でいろいろ話してくださったことです。その雑談の中で、日本の経済とか世界の経済、ドイツはどうだとか、そのほか社会万般の話をしてくださるわけです。それが非常に勉強になったような気がします。

三瀨 経済原論はどなたですか。

鮫島 舞出長五郎さんです。大内先生が財政論。有沢先生は、初め1年生のときには外国語講読でリカードの原書を使いました。

三瀨 セミの中には、鈴木鴻一郎さんと、あとどんな方がいらっしゃいましたか。

鮫島 あと学界に出た人は、僕の次の期に入ってきて、僕と重なった人に安藤次郎君、それから東京経済大学の教授をしている木原行雄君(国際経済論)。学者で残ったのはそのぐらいです。

三瀨 統計学者とすれば、鮫島先生だけ。

鮫島 僕は、何も統計をするつもりはなかったのですが、偶然にも食いっばぐれて、森田優三先生に拾われたばかりに、統計学周辺の端くれになったわけですよ。

森 数あるセミの中で、特に有沢セミを選ばれたきっかけは何ですか。

鮫島 有沢ゼミに参加した連中は、ある意味では学問が好きで、将来就職するとき、先生のグループにいると損をするぞというような配慮をしなかった連中だったかもしれませんね。

僕が有沢ゼミに参加したのは、その当時の先生の新しみにひかれたんでしょね。新進気鋭の助教授でしたから。それと、僕は有沢先生の名前は、昔からよく知っていたのです。というのは、僕の兄貴とクラスメートだったのです。そんな関係があるものだから、僕が兄貴の弟だということは名乗らないで応募したのです。ですから、何ということはなくそういうことになったわけですね。

いまから考えますと、非常にいい先生にめぐり会ったと思っています。有沢先生がちょうど助教授時代に、学校行政に何にも関与していなくて、研究生活だけを楽しんでおられるような時期だったのです。僕らと年齢差がちょうど1回りぐらい、ちょうど14歳ぐらいしか違わないのです。ですから、ちょうど兄貴ですよ。そして、戦前のゼミのグループは、有沢先生と非常に親しくなった連中が多いのです。先生の不遇時代にも、ずっと交際が続いていったという人が多かったわけです。

そのほかには、僕はあまり本郷には追憶がないですね
三瀨 そのころの世の中というのは、ご承知のように5・15事件だとか、滝川事件とか、天皇機関説とか、あまりよくない世の中になりつつあるでしょう。

鮫島 僕の年代が、高等学校(旧制)で自由主義的な教育を受けたおそらく最後だったのです。昭和6年から指導教官制度というのができまして、僕が卒業したのは昭和6年の春です。指導教官制ができてから非常に窮屈に

なりまして、映画を見に行くのでも、指導教官に相談してからというような制度になりましたから、有沢先生自身も「昭和6年を境にして学生の気質がちよっと変わったね」という感想を漏らしておられたことがありました。僕らが最後なのですね。

2

三瀨 国政研究会に就職なさるわけですが、そのきっかけ、あるいは国政研究会自身はどういう仕事をやっていたのですか。

鮫島 国政研究会というのは、僕は非常につまらないところだと思っていたのですが、後から振り返ると、案外おもしろいのです。

僕は就職にみんな失敗しましてね、どうもいい就職口がないものですから、ある人に頼んだら、その人がちやうど一高時代に船田中さんとクラスメートだった人だったのです。「私に任せてくれますか」というから、しようがないからお任せしたら、船田中さんに話をつけたらしいのです。

当時 政友会のインテリ若手の連中の研究会として、国政研究会というのがありまして、それは中島知久平氏が親玉なのです。鳩山一郎・芦田均・小笠原三九郎・船田中など、錚々たる連中がそのメンバーでした。一体そこは何をやっていたかといいますと、そういう船田さんたちが、自分では外国の文献を読んでいるひまもないし、力もないということ、主としていまの一橋大学、当時の東京高商の助手とか助教授クラスの人を頼みまして、外国書の講読会、読書会をやっていたのです。そのころ

何を勉強していたかは、僕はその方に関係していませんでしたからわかりませんが、ナチスの制度なんかを盛んに勉強していたようです。

そういうのが一つと、もうひとつは、国政研究会というの、実際の調査活動のようなのもやっていたのです。そこに、主査として東畑精一先生と猪谷善一先生二人がおられて、僕らが何かをまとめたら、猪谷先生と東畑先生に報告するわけです。そのときに取り上げられていた主題は、中小企業の金融なのです。ちょうど中小企業問題が論議されている最中でして、そこで、どういう手続でサンプルを選んだか、そこそこは僕はタッチしませんでした。が、中小企業の金融調査、資金繰りの調査をやっていたところへ、僕は入っていったのです。

同時に、僕ら研究員には、それぞれ分担して金融関係の課題を与えたのです。たとえば高利貸し調査専門の人であるとかですね。僕は何を与えられたかという、質屋、庶民金融をやれというのです。実にかっかりしました。質屋について、そのころ、やっと多少まとまった文献が出たころです。それを見ますと、不景気なものだから、質屋はどんどん少なくなっているわけです。だから僕はこれじゃ将来質屋はなくなっちゃうだろうというようなことをいって、猪谷先生に笑われたことがあります。

次に与えられたのは、頼母子講の研究でした。無尽ですけれども、ちょうど昭和10年ごろに農林省が全国の「頼母子講に関する調査」をしまして……。

三潁 あれはやっぱり農村地帯が盛んなのでしょう。鮫島 農村地帯です。農林省ですから、都市の無尽はやらないで、「頼母子講に関する調査」報告書を出していた

のです。僕は、それをもっばら分析しました。その時の報告は、東畑先生に、なかなかおもしろいと褒められて多少気をよくしましたね。

それから、さきにあげました「中小企業の金融調査」という実地調査のまとめについて申しますと、この金融調査の調査票が集まってきたとき、それをまとめるやつがないのです。仕方ないので、それを僕がやってやろうと、いって引き受けたわけです。それはサンプルが少ないし、分析しようといったって、そう分析できないのですから、調査対象となった中小企業群を大小規模に2分して、なんとかまとめたように記憶しています。

ですから、国政研究会で僕がした仕事は、質屋のことで、頼母子講と金融調査をまとめたというこの3つで、あとは喉頭結核を宣告され療養のため退職しました。そこに、長くいるつもりもなかったものですから。

三瀨 猪谷先生というのは、どういうご専門だったのですか。

鮫島 猪谷先生は、日本経済史が専門らしいのです。森田先生の話によりますと、猪谷先生は上田貞次郎氏の高弟で、非常に有能な人で、将来は一橋大学の学長たるべき人だったとのことですが、僕の印象では学者というより事業家タイプの人でしたね。

三瀨 いま、国政研究会で、中小企業関係をなさったとおっしゃいましたけれども、有沢ゼミ時代と何か関係がございますか。

鮫島 僕らのゼミ時代には、全然触れなかったです。中小企業が日本の国民経済の中でどういう位置を占めるかという議論がされていたのが、ちょうど昭和初頭から10

年ごろにかけてではなかったかと思えます。ですから、
 国政研究会も、そういう風潮に乗って、実態調査を試み
 たのだらうと思うのです。

森 今回の聞き取りで、京都の蜷川先生のお弟子さんの
 うちの何人かにすでに面接したのですが、蜷川先生自身
 も西陣の中小企業に出入りしていたという話を聞きました。
 彼のことでですから、協同組合でもつくってやったら
 どうかということではなかったかと思えます。こういった
 点を考え合せると、日本全体が中小企業に目を向けて
 いるという時代だったのでしょうか。

鮫島 そういう時代ではなかったかと思えます。いまま
 で中小企業というのは、少なくとも経済学者とか、学問
 的な意味で取り上げられたことはないのです。大正末期
 から昭和初年にかけて、企業間の系列化が始まる。二重
 構造とか、そういうことがだんだん定着してきた時代だ
 ったらうと思うのです。その形と不景気とが重なりま
 して、中小企業の倒産とかそういうことが問題になって
 中小企業の経営問題がいろいろな方面で議論されつつあり
 ました。

三瀨 それとやっぱり不況から、今度は軍需産業の下請
 再編成という中小企業の問題にだんだん移っていきます
 ね。その辺の時期なのですね。

鮫島 ちょうどそういう時期ですね。ですから、そこで
 論争されたのは、中小企業は資本主義の法則に従って、
 とんどん淘汰されるなら、それでいいじゃないかという
 議論と、いや、そうじゃないのだ、というのは、昭和8
 9年ごろから輸出がふえてきました。輸出品の主要なも
 のが、ブラウスとかハンカチとかおもちゃとか、雑貨な

のですよ。そういう物のもとを調べると、浅草あたりのケチな裏店の町工場なのです。

三濑 中小零細企業ですね。

鮫島 それを擁護しなくちゃいけない、育成しなきゃいけないのだという議論と、いや、自然淘汰に任せておけ。その方が日本経済のためになるのだという議論が、対立していました。そのころの問題ですよ。

三濑 そういう理論上のことより、国政研究会はもっと実証的な……。

鮫島 国政研究会は、何となく時流に乗ってやってみようかということみたいでしたね。あのときには、各自治体も中小企業の調査活動を盛んにしていますよ。そのとき、労働の方から入るのと、経営の方から入るのと、2つの視点があるのです。ですから、そういう同じようなことが、学会でも論議された。ちようどそういう時期ですね。

森 国政研究会は、もっぱら金融問題を取り扱っていたのですか。

鮫島 金融ということみたいだったです。僕は猪谷先生の本当のねらいがどこにあるのかは知らないで、無我夢中でまとめたのです。

森 調査活動は、いろんな側面からアプローチするといふのじゃなくて、かなり金融的側面を中心に、中小企業の実態を調べるということですね。

鮫島 中小企業全体を見るという大きなプロジェクトは、何もなかったようですね。

三濑 会として報告書が出されたわけですか。

鮫島 あれは報告書を出したのでしたか、いま記憶して

いません。

3

三瀨 それからご病気をなされたわけですがけれども、前から調子が悪かったわけですか。

鮫島 僕は大学時代から、検温器を万年筆と一緒に持って歩いていました。結核だったのですけれども、ジワジワとだましましやあっていて、すぐ治ったり寝たりということで、そのために大学のときの試験を受けられなくて、1年留年したわけですね。

三瀨 調子の悪いのは、静高のころからですか。

鮫島 静高のときも、肋膜炎といたって結核です。1年留年しまして、だから2年留年したのです。

三瀨 それで約1年以上休まれて……。

鮫島 2年近く休んでいました。その間に、僕はただブラブラしていてもしょうがないから、商工会議所の図書館に通いまして、日本の農業問題を勉強したのです。その当時刊行されていた農業の文献は、かなり目を通したものです。

東浦庄治さんという帝国農会の幹事長をされて、後で参議院議員になられた農政学者がいました。これが八高時代の兄貴の友人だったものですから、兄貴を通して、東浦さんにどこか職がないかと頼んでいたわけですね。そのころ、ちょうど昭和14年、だんだん物価問題がやかましくなってきた、統制という問題に入ってきたわけですね。それで中央物価統制協力会議という奇妙な機関をつくるというので、そこに帝国農会も、社団法人の一員として

入っているわけです。そこで東浦先生が僕を中央物価統制協力会議事務局に推薦してくださったのです。

三瀨 昭和14年の物価統制令の関係で、協力会議ができたのでしょね。

鮫島 その関係ですね。

三瀨 ちょうどその前の年の13年には、教授グループが検挙されたり、だんだんそっちの方に世の中は移りつつあったわけですね。

その中央物価統制協力会議のことで、若干伺いたいのですが、組織といいますか、どういう省庁が……。

鮫島 あれは、日銀が非常に大きな資金援助をしていたらしいですよ。最初の会長は、郷誠之助さんだったのじゃないなかったかと思います。ちょうど政府が物価統制を始めるといふから、その民間とのパイプ役という形で、協力会議というのをつくったのです。

三瀨 組織は、何かの上部団体……。

鮫島 中央物価統制協力会議、それから地方の物価統制協力会議も、力はあまりありませんでしたが、それを都道府県ごとに置いたような組織でしたね。

活動の仕方は、農林部会とか重工業、軽工業、繊維部会、金融部会とか、部会を組織しまして、官庁の人、民間業界の人、消費者・学識経験者で部会をたくさん編成して、意思の疎通、あるいはこの商品についてはこのぐらいいは値上げせざるを得ない段階なんだとかというようなことを審議し、その決定事項を所管官庁に建言する機関だったです。

あのころは、おかしいんですが、不景気な時代だったものですから、人生行路が順調にいかない浪人みたいな

連中が、そこには大ぜい集まっていた。相原茂氏もその一人でした。

三瀨 末永茂喜さんなんかは……。

鮫島 中央物価統制協力会議の中に、調査部というのがあったのです。その部長として最初にいたのは、志村茂治さんという戦後に社会党の代議士になられた人です。

その人がやめられまして、その後任として、末永先生が来られたのです。

三瀨 東北大をやめた後ですね。

鮫島 東北大にいられなくなった、そういう事情があったのじゃないですか。

三瀨 例の宇野事件との関係です。

鮫島 そのときに、中央物価統制協力会議で、ヤミ物価調査をしていたのです。当時、ものの価格ではっきりわかるのは統制価格ばかりなものですから、実際のヤミ価格の実態は何か。そして僕らが調べたのは、主として生活必需品なのですけれども、あの当時は、生産財のヤミの方が先行していたのです。三井とかそういう大企業がヤミを始めて、物価統制令ということになった。そのヤミ物価の収集にさいし、物価指数のつくり方や何かで、森田優三先生を囑託としてお願いしていたので、僕はここで初めて先生と相知ることになりました。

三瀨 そのころ、森田先生は横浜高商ですね。

鮫島 だから、そのころ、先生は調査部にときどき見えまして、部員をいろいろ指導されていたわけです。

そのときのヤミ価格データを使って、森田先生は、いわゆる森田指数というのをつくられたわけです。それをやっていた人の一人は、いま経団連の専務理事をしてい

関成一君です。
 三瀨 末永さんは、協力会議に入られるときは浪人ですか。
 鮫島 東北大をやめられた後、どうされたか、その話は聞いてないです。
 三瀨 相原さんは？
 鮫島 相原氏は、全国購買組合連合会というところに入ったのです。当時の産業組合です。あれはどういうわけかわかったのか、食いつばぐれたのか、どうしたのかよくわからないけれども、僕が行ったときには、農林部の課長クラスの1人でした。そこへ、僕が入っていったわけです。だから、ちょうど相原さんが親分で、僕が女房役みたいな形で仕事をしたわけです。
 三瀨 相原さんも有沢ゼミ……。
 鮫島 相原さんは、有沢ゼミには正式には参加されていないようでした。けれども、有沢さんとか大内兵衛さん、美濃部亮吾さんたちと非常に親しいのです。有沢先生と個人的に親しかったようですよ。
 森 協力会議というのは、実質的には日銀の外部団体のような存在なのですか。
 鮫島 日銀の外部団体という形ではありませんでした。だから、日銀にいろんなことを報告するとか、そういう義務は何も負っていなかったようです。
 森 日銀が資金だけは提供するということだったのですか。
 鮫島 社団法人という組織だったのです。ですから、各団体がそれぞれ多少は基金は出していたのだでしょう。その組織はよくわからないのですけれども、ただ、月給は

よかったです。

三瀨 官吏並みよりは……。

鮫島 何か非常によかったようです。というのは、月給をよけい出さないと、クズしか来ないという考え方があったらしくて、そこで非常に風変わりな人物が集まってきました。初めは事務局長が本位田祥男先生でした。

三瀨 事務局は何人ぐらいのスタッフで……。

鮫島 60人ぐらいいたのじゃないですか。だいぶ大きかったですね。

三瀨 場所はどこにあったのですか。

鮫島 初めは、日比谷の貴族員の古い建物にいたのじゃなかったかと思います。その後、日比谷かいわいの富国生命ビルに移りました。要するに、日比谷あたりが根城でした。

三瀨 協力会議では、さっきもちよっとおっしゃった森田優三先生が、物価指数の指導をされたのでしようけれども、そこで、鮫島先生の仕事は……。

鮫島 僕は農林部にいまして、後では工業の方も関与したけれども、農林部門の価格統制に関連する事項でした。僕がタッチしたうちで一番おもしろかったのは、生鮮食料品の価格統制なのです。特に魚の価格統制というのは非常におもしろかったですね。あれは昭和15年に始まったのです。まず農林省が72品種の魚——それは非常にまともな魚です、イワシ・サバ・マグロ・カツオ・ヒラメ・タイ、こういう普通の魚の最高価格を決めたわけです。最高価格というのは、いま正確な規定をはっきり憶えていませんが東京など大消費地での最終販売価格だったと思います。

森 大きさによっても違うわけですか。たとえばサバについて、何種類かというように。

鮫島 うんと違うのです。その魚については、問題が無数に出てきたわけです。まず72品目を統制して、官報に発表した。そうしましたら、その翌日か翌々日か築地中央卸売市場に72品目がほとんど出てこないのです(笑)。パッと影をひそめた。そしてまだ価格を決めてない自由価格の魚がドッと出荷されて来る。それで農林省はあわてまして、未統制魚種のいくつかの統制価格を追加指定した。指定すると、その魚はパッと市場から姿を消す。少しは出てきますけれども、中央市場は極度に品不足になるのです。そのかわり、それに負けなだけの自由価格のものがドッと押し寄せてくる。だから、だんだんおかしなかつこの深海魚までが、築地の市場に集まってくるわけです。

森 規定外のやつが集まって来るわけですね。

三濤 まともじゃない魚が……。

鮫島 だんだんやって、とうとう僕が見に行った最後のときは、深海魚ですよ。ハラグロなんていうおなかが真っ黒で、ピンポン玉を詰め込んだように丸くふくらんだひげが5〜6本あるのが、樽に入れて、いくつも並んでいる。こいつは臭かったですよ(笑)。

もうひとつ僕が覚えているのは、アブラガレイというやつで、これも深海魚ですが、魚市場の小売商業組合連合会会長の塩沢達三さんという当時大ボスだった人がこゝろ話してくれましたね。アブラガレイというのは、しちりんで焼くと、油が多いからボウボウ燃えて、焼き終わったと思うころは、骨だけになっている魚だというので

す(笑)。そんな魚は漁師はとらなかつた。とつたとし
ても、肥料ですよ。ところが、そればかり出てくるよう
になって、とうとう農林省は、「その他の魚類」といって、
深海魚を含めて全部最高価格を決めたわけです。

つまり、僕らが学んだことは、価格統制は一度やり出
したらとことんまでやらなければダメだということです。
それから価格統制をやるためには、配給ルートがきちっ
としていなきゃならないのだけれども、相手が漁船です
と、無線で情報を取っていますから、どこにでも水揚げ
しちゃうわけですから、漁師は、サバとかカツオ
をとらなかつたわけじゃない。とっているのですが、ヤ
ミの水揚げをするので、出廻りが地域的に非常に偏在し
てしまうのです。そういう現象が非常にはつきり出まし
た。

それでも僕らは、物がどんどんなくなるのだから、統
制は必要だろうと考えたのです。部会の人々も、全部そ
ういう考えなのです。たとえば市川房枝さんとか羽仁説
子さんも、学識経験者として部会に入ってもらって、意
見を聞くと、「それはしようがないでしょう」というわけ
です。ところが、ただ一人反対する人がいた。それが石
橋湛山でした。あの人は終始自由主義を主張しましたね。

三瀨 そのころ、石橋湛山さんはどこに……。

鮫島 あのときは、東洋経済新報社の主筆か何かです。
石橋さんだけでした。鮮魚というものは、統制しちやい
けないのだ。自由にしなければ増産はできない。その方
が本当だったのか、統制した方がよかったのか、いまで
もちよつとわかりませんね。

ただ、すべての統制は、地方色をなくしてしまう作用

をもつものですね。たとえばキンメダイという魚がありますね。いまではかなり上等扱いられてます。そのキンメダイというのは、関東ではマダイの代用品として、結婚式なんかのお祝儀用の魚に使われていたために、尊重されていた。したがって値もよかった。ところが、関西の人は、マダイがあるからキンメダイを非常に軽蔑していたわけです。したがって値は安かった。

ところが、価格を決める場合は、キンメダイは全国一本の線を決めるわけです。そうすると関東の漁師は、こんな決め方をされちゃ商売ができないという。関西の人は、こんな価格をつけてどうするんだ、高過ぎるマダイとのバランスがこわれるという。そういう問題が無数に出てきました。つまり地方価格のアンバランスというもの。しかし、庶民の嗜好は物が不足してくるのだから、いやおうなしに矯正されざるをえない、こういうわけで統制というものは、強制的に地方性を奪ってしまう作用をはっきり持っていましたね。

三猪 協力会議で対象にしたのは、民需品だけですか。鮫島 軍需品そのものはやっていませんでした。繊維とか、民需的なものが多かったですよ。軍需品になりますと、メーカーの方もしっかりしていますし、行政側とメーカーとのやりとりになってしまっただけで、第三者が介在する余地はないのです。

ところが、魚とか野菜、卵になりますと、そういう余地があった。業者がみんな力が弱いですから、ある意味ではそれを代弁したり、なだめたりという役割を、多少はしたわけです。

三猪 物価統制令を円滑に施行するための、さっきおっ

しゃったパイプ役、そういうのが仕事の……。

鮫島 そうだったですね。現実にはどのくらい役に立ったかという、疑問だと思いますけれども。

三瀨 ヤミ価格の調査は、官庁自体ではやらなかったのでしょうか。あるいは、やれなかったというか。

鮫島 やれなかったのか、全然やっていません。

三瀨 そうすると、ヤミ価格のデータというものはここから出ていった。

鮫島 ここから出たのは、非常に不完全なものなのだと思いますけれども、ほかにデータが残っていないです。

森 日銀が、ヤミ物価調査みたいなのをつくっていませんか。

鮫島 それは戦後ですよ。戦前は、もっぱら何とかして統制価格を励行させようという意識が先行していたのでしようね。

森 ヤミを認めたくないということだったのでしょうか。

鮫島 そうしたことだったのですか、ヤミ調査はないですね。

三瀨 CPSなんか出てくれば、統計局が官庁統計としてヤミ価格を調べるわけですが。

鮫島 戦後は無数にやったのですよ。警視庁も、日銀も、商工会議所も、そのほかいろんなところがヤミ物価調査をやりました。けれども、戦前はないですね。

三瀨 この協力会議というのは、終戦まであるわけですね。

鮫島 20年まで。20年で自然消滅ですね。

三瀨 だんだん戦争が激しくなってくると、協力会議の仕事は変質していくのでしょうか。

鮫島 変質もしないけれども、仕事がなくなりました。
 つまり、下請工場の価格の問題で、われわれが町工場へ
 行くでしょう。沼津のどこそこへ行くと予定しておいて
 も、爆撃や何かで行かれなくなって、仕事そのものがで
 きなくなってきました。仕事の方針そのものはあまり変
 わらなかつたと思うのですが、仕事ができなくなった。
 ですから、僕らは戦争中は、吉祥寺に分室を置きまし
 て、そこに通勤したけれども、仕事は何にもないのです。
 天下の情勢がどうなるかと思って、情報をさぐりに有沢
 先生のところに行くのです。有沢先生が、そのころ高橋
 亀吉さんの研究所を借りまして、その倉庫みたいなと
 ころに机を一つ置いていらしたですね。そこへ、僕らが
 天下の形勢を教わりに行くわけです。

三瀧 もう終戦らしいというのは、感づいていらした。
 鮫島 それは、わかっていましたよ。有沢先生はどうし
 てか、情報をたいへんよくご存じなんですね。いま御前
 会議をやっているところだとか、あさってには決着する
 とか。ですから、それはわかっていました。

三瀧 協力会議は、いってみれば自然消滅の解散になる
 わけですね。

鮫島 自然消滅です。本位田先生は途中でやめられて
 そのころは中西寅雄先生がかわっていたのです。もう一
 人、のちに東北大の教授になられた鍋島達さん。中西先
 生の弟子である鍋島さんが、昔の飲み仲間であった末永
 さんを引っ張ってきたんですね。

そして残務整理には、僕と金沢良雄君、末永さん、い
 ま経団連にいる関成一君、こういう人たちが残りまして、
 戦時物価統制史というのを編さんしようということにな

つたのです。「戦時物価史」という名前でした。僕は、「生鮮食料品の価格統制」という原稿をつくったわけですが、末永先生がインフレーション総論、関君たちがヤミ物価調査、そのほか繊維部門とかそれぞれ担当しまして、価格統制がどういうふうに関開されたかという原稿をつくって、鍋島さんに全部預けた。そのとき、企画庁でいちやもんがついたか、GHQでいちやもんがついたかで、しばらく出版ができなかったのです。そのうちに、その原稿自体の所在がわからなくなりまして、ちょっと惜しいことをしました。

三猪 結局、出なかったのですか。

鮫島 出なかった。日の目を見ないで埋没してしまっただけです。惜しいことをしたと思います。

4

三猪 先生の履歴書では、21年の春に経団連の事務局内に新設された統計局に入られるということを書いていらっしゃるのですけれども、経団連の統計局というのは、どういう仕事だったんですか。やっぱり統計局という名称だったのですか。

鮫島 戦前に経済連盟というのがありましたね。それを解体して、組織がえをするというので、経済団体連合会準備委員会とかいうのを作り、帆足計氏らがその運営にあたっていたと思います。そのときに帆足さんの発想で——これは帆足さんの見通しの誤りだったと僕は思うのですが——民間の統計を盛んにしなくちゃいけないという発想で、経団連の中に統計局という部局をつくる。そして、さしあたってそのキャップに、有沢先生を持っ

てこようにいうのです。有沢先生は、ちょうど東大に復帰されたばかりのころですが、先生も引き受けられました。

そこで、そこに統計局をつくる。一体つくってどんな仕事をするのかというのは、皆目わからないわけです。ただ、民間の統計を盛んにしたいのだ。というのは、民間自体がいろいろな調査を計画するのか、どうもよくわからないのです。そういう余地はないし、戦後の働き方としては、民間の統計活動というのは、自分たち私企業のための戦略を決定するものとしておこなわれる傾向があり、みんな秘扱いにならざるを得ないし、公共の財としての統計データを提供するのは官庁の任務になるし、そうならざるを得ない。戦後の統計の在り方は、そういう傾向を内包していたと思うのです。帆足さんがどういう考え方をされていたかわかりませんが……。

僕は、そのころまた結核がちょっと再発しまして、フラフラしていたのです。失業をしているわけです。生活に非常に困ってしまっていたのです。そのときに、相原さんから、「君も手伝わないか」という話がありました。末永さんからも話があって、僕も参加しました。末永さんの弟子である関成一氏とかいう人たちが行ったし、有沢ゼミの安村重正氏（中央大学の国際経済関係の教授）とか、そのほかいろいろな人がいました。そして、統計局というのができたのです。

僕は、さしあたりこんなことを計画しました。戦時中の商工省の生産統計は、欠落している部分がたくさんあるのです。金額だけが出ているけれども、数量がないとか、そういうのを補正して編成し直す仕事を始めようか

ということ、商工省の専門家にも、補正の仕方はこんなこと、いいかと確かめたうえで、きわめてシンプルなやり方なのですが、関君と一緒にやりましたけれども、それは物になりませんでした。

そして末永さんの発想で、経団連に加盟している各企業を対象に、操業度の調査という一種のアンケート調査をしました。経団連の統計局でやったのは、それぐらいでしたね。そして、1年たちましたら、あれは何もやらないし、おしゃべりはばかりしているから、やめようということになった。

三瀨 それは昭和22年ですね。

鮫島 そこで経団連としては、残りたいた人は残りなさい、やめたい人はやめなさい、こういう自由意思に任せてくれたわけですね。僕は、やめることにしたわけですね。そうしたら、やはり金持ちなんですね。あなたの次の職場が見つかるまで、ここで月給を出してあげるというのです。非常に助かりました。それが8月ごろです。そして、僕が当時の総理府統計局に拾われていったのは、その年の12月ですから、4カ月分はただで月給をもらったわけですね。これは僕の人生における一宿一飯の恩というべきものでしたね。

三瀨 関さんはずっと残られたんですか。

鮫島 残って、現在は専務理事をされています。

三瀨 相原さんや末永さんは……。

鮫島 ちょうど森田先生が統計局長に就任されて、そのときの組織の中で部長クラスの人はいない。経済部長として末永さんを引っ張ったわけですね。僕は、経団連の月給をただでもらって、ブラブラしていたわけですね。そし

て、末永さんと森田先生が、僕に22年の12月に統計局へ来ないかという話になりました。

5

鮫島 これは政府が消費者物価指数(CPI)をつくるというので、消費者価格調査(CPS)をやり始めて間もなくのころでした。そのとき、末永さんたちの話では、ちょうど課長の地位に就くべき人が、みんな若過ぎていないというのです。それで僕に来てくれということになりました。そして、そのころGHQでは、そういうところの長になる人物は、みんな専門家であるべきだという立場をとったらしいのです。それで、僕が『戦時物価史』の編さんに従事したということ、末永さんがちゃんと履歴書に書いてくれというわけ、どうもそれが物をいったらしいのだ(笑)。僕は、物価の専門家ましてや物価指数の専門家じゃ全然ないのに、『戦時物価史』のおかげで、森田先生がここへ拾ってくださったわけ、です。

三瀨 そのときは、CPSは……。

鮫島 昭和21年の7月から始まっていました。僕は英語も何もできないのだがどうだろうといったら、英語は末永部長がGHQとはやるから、君は裏方をやってくれということで、当時の経済部経済第一課長として入局したので、す。

三瀨 そうすると、経済第一課というのは、いまでいえば……。

鮫島 消費統計課です。

三瀨 守岡さんはそのころはまだ……。

守岡 僕は、22年の5月に入った。局では、先輩なわけです。

鮫島 僕は、22年12月26日で……。

三瀧 よく覚えていらっしゃいますね。

鮫島 とにかく失業者で、拾われたときですから。そのときの統計局に提出する履歴書には、経団連で幾らもらっていたか、僕の月給を書けというのです。それで、森田先生に見せたら、「困ったな、この月給は僕の月給より高い」といわれるんですね(笑)。

森 統計局長よりも高給取りの失業者だったわけですね。

鮫島 しかし、僕はそのとき5000円ぐらいしかもらっていませんでした。それで、「もっとずっと低くなるよ」という。低くなったって、僕は失業しているのだからお願いするより仕方がない。ですから、そのときは困りましたね。苦しかったですよ。半分とまではいかなかったけれども、3分の1以上カットされたような形になりました。あのときは本当に一番貧乏していました。しようがないから、蔵書の中で少しカネになるような、たとえばヒックスの『価値と資本』の原書などを古本屋へ持って行って、お金にかえたのです。

三瀧 そのころのCPS(消費者価格調査)は、さっき話題に出ましたように、公定とヤミと両方の家計支出を調べたわけですが、さっきの物価統制協力会議でのヤミ価格調査は、幾らか参考になりましたか。

鮫島 それは、何にもならないのです。最初のCPS(消費者価格調査)は、初めから配給のものとヤミのものとを、加重平均した形のものでですから。

三瀧 実効価格。

鮫島 標本世帯の主婦の買い物伝票から、実効価格 (effective price) を計算したもので、物価統制協力会議のマミ価格調査とは全然続かないです。だから、このときのマミ・データと戦時中の配給価格と推定ウエートを使って、戦時中のちょっと短い期間の実効価格のカーブをつくられたのがいわゆる森田指数です。

三瀨 CPSは、鮫島さんが統計局に入られたときには、すでに始まっていたわけですがけれども、日本の官庁統計でランダムサンプリングが採り入れられたのは、あれが第1号でしょう。

鮫島 第1号だと思いのです。民間では、戦前でも保険会社や何かの多少の実例もあるし、佐藤良一郎先生も、戦前にもやっていたことがあると書かれています。

三瀨 家計調査では、もちろん官庁統計第1号ですね。

鮫島 官庁では、あれが第1号になると思います。

三瀨 高野先生の家計調査や戦前の統計局の家計調査は、ご承知のように一種の典型調査でしょう。それで急にランダムサンプリングに切りかわったのですね。そういう問題について、何かお考えになりましたか。

鮫島 そのころでなく、後になってから、たとえば戦前の家計調査を時系列として使えるかどうかということ考えた場合に、うまく使えないのです。そういうことから、有意に選ぶ場合とそうでない場合、つまり資格条件を決めて、ことに所得についての資格条件を決めた場合、所得がどう伸びるかという足取りは初めからはかれませんね。そういうことはずっと後、統計局に入ってから考えたことですね。

有意に選ぶ場合に、その有意な標本世帯をいつまでも

調査してきますと、その世帯の個別的な成長が、平均値
 に影響してくるのです。それで、ゆがみが出るのです。
 だから、有意な調査の場合でも、典型調査の場合でも、
 標本は交代する必要があるのじゃないかということ考
 えていたのは、ずっと後のことなのです。
 ですから、時系列でなしに、特定集団の詳しい内部構
 造について情報を得るといえるときは、有意標本でいい場
 合があると思います。それから、たとえば会社とか地域
 とかというのは、全体の構造がわかっているならば、ランダム
 に選んでみて、その中で有意な標本をつかまえるとい
 うのは、いい方法じゃないかと思うのです。そういう考え
 は戦後否定されていましたが、いまの家計調査だ
 って拒否したり何かして、あれは半分有意標本ですから、
 三瀨 階層別にやることか、ある意味では有意であって
 鮫島 ですから、地域とか何かは、たとえば高所得階層
 の世帯が多く住んでいる地帯を、標本理論で層としてと
 ってくる。事業所なんかもその経営規模の大小を層とし
 てとってくる。その層の大きさに比例して標本を割りあ
 てるが抽出は有意選定する。これはできると思うのです。
 その方が、調査の質はよくなるのじゃないのかという気
 がします。
 三瀨 労働力調査が始まったのは、C P Sよりもっと後
 ?
 鮫島 2カ月後。9月でした。
 守岡 両方とも21年ですね。
 三瀨 G H Qとの業務上の折衝はすいぶんおありになっ
 たのですか。
 鮫島 それは、僕はほとんどやらなかった。それはもっ

ばら森田先生と、末永さんと、現在山一経済研究所にお
られる明石頌氏のような英語の非常にうまい人がやって
いました。

森 話は前後しますが、森田先生が統計局長になられて
その前の川島さんはどうなられたのですか。

守岡 川島さんは、局長をかわりまして、それからすぐ
かどうかわかりませんが、国会の専門調査員にな
られたのじゃないですか。

鮫島 僕が初めて川島さんにお会いしたのは、専門調査
員のときでした。

森 川島さんの時代に、中央統計局なるものをつくりた
いという動きがあったわけですね。

三猪 川島私案。

鮫島 川島さんが出されたらしいですよ。

森 森田さんの時代になって、もう時代が変わってしま
っていただけですね。

鮫島 森田先生は、そういう構想を出されたことはない
でしょう。

森 その影響は、統計局の中にはほとんど残っていませ
んでしたか。

鮫島 ないし、あれは無意味なのですよ（笑）。

森 あの構想は、統計局の中でももともと浮かび上がっ
ていたわけなのでしょうか。

鮫島 以前は、統計局の人が、よくそれを主張していま
したよ。しかし、それは、ひとつの縄張りの拡大という
意味しか持っていないです。ですから、日本の統計ので
き方からいいますと、できないことで、結局、戦後の統
計委員会制度が、分散型に対応した形としては必然的な

帰結じゃないのかと思います。
 三 瀧 ヤッぱり行政が縦割りで、統計行政も縦割りだか
 らという現実から見れば、おっしゃるとおりでしょうね。
 鮫 島 日本の統計の始まりといいますと、統計をつくら
 うなんていう意識じゃなくて、たとえば地租改正という
 仕事で、どうしても土地台帳をつくらなきゃならないと
 いうようなことで、調査活動が始まっています。ですが
 ら、行政の実施機関が全部調査活動もやっている。大蔵
 省に必要な統計は、大蔵省自身がやっているわけでしょ
 う。内務省も、そうでしょう。ですから、最初から統計
 の分散型という軌道ができてしまっただけ、そういう軌道に
 ならざるを得ない形になっています。
 そして戦前は、それをひとつの縄張りの形で、理屈の
 つけ方は、行政事務を効率的にやるとか、そういうこと
 で中央統計局の方がいいのだという論法なのですけれど
 も。
 森 ああいう構想は、戦前からあったわけですか。
 鮫 島 戦前からです。
 森 もっぱら統計局側で主張していたわけですね。
 鮫 島 要するに統計局の力が弱いから、そういうことを
 声を大にしてやっていったというふうに考えられるのです。
 日本の行政そのものを合理的に運営するために、どうい
 う調査が必要なのかという発想の仕方はなかったわけ
 です。そういう後者の発想が出てきたのは、戦後のことだ
 と思います。
 森 統計活動ひとつにも、それぞれの行政がテリトリー
 を持っていて、その中に統計も位置づけられている
 わけですね。そうなりますと、たとえば人口動態統計み

たいに移管がときどきありますと、そういうときには、関係の省の間では、いろいろコンフリクトが出てくるわけなのでしょうか。

鮫島 人口動態は、もともと内務省がやっていたのですね。太政官はやっていなかったわけですから、もとへ戻したわけですよ。

だから、ややこしいのです。家計調査を、労働省の人がオレの方によこせという交渉に、何回かやってきたことがありました。そのときは、家計調査の最初の原型は社会局が設計したわけですから。やはり、オレの方がもとじゃないかということですね。

森 労働力調査が始まったときには、すでに労働省は発足していたのでしょうか。

守岡 ないです。

森 それをよこせという話はないですか。

鮫島 あれは、人口調査のグループだというわけです。

守岡 その関係では、統計局の課が、戦前からずっと調査をやっているところは、人口課に労働課なのです。22年5月に、局がほかを変えないで、ただ労働課という名前を経済課に変えたのです。それは労働省ができたからですね。

例の川島さんの案、友安さんに聞いたことなのですけど、あれは川島さんが自分一人でやっていて、局のだれにも話さなかったというのです。自分一人が一生懸命苦勞してやっていたのです。その関係の資料を、例の『総理府統計局百年史資料集成』第1巻で全部出しましたけれども、あれはあまり人の目に触れていなかったのです。

森 何となく動きの表面だけを見ていますと、川島さんが統計局の総意をくみ上げて、その力をバックに、統計局の力を拡充しようという動きに見て取れたのですが、そういうことじゃないわけですね。

守岡 というよりも、自分が最大の推進力じゃないのですか。

三瀨 だから、同調者は外でもあまりいないでしょう。

守岡 それを問題にするような余裕が、世間一般にないし、各省の方では、初めから何いつているかというような。前も一遍あるのですが、昭和の初めもそうですね。

商工省が全面的に反対した。それは要するにセンサス的統計又は第1次統計をみんな局に持ってくるという話でした。

三瀨 そういう土壌は、日本にはないのですね。

それでいまの経済第一課のときに、またご病気になられて、昭和26年に休まれるわけですか。

鮫島 あのと、いろいろな経済統計をやっているのが第二課になっていたのですが、課名を一と二とひっくり返したことがあったのです。僕は第二課長というふうになったことがありまして、昭和26年のときはその第二課のころでした。僕は菌が出るようになって、人にうつったりしてはいけないから、休まなければダメだというわけで、医務室から指示が出た。いよいよしようがないから手術しようかということになって、肋骨を6本切ったのです。いまはあんなバカげたことはやりません。それで実質的には2年半ぐらい休んでいました。

三瀨 29年にまたよくなられて……。

鮫島 そのときに、『統計年鑑』などをつくる資料班とい

うのがあったのです。編集部ですね。そこに復活した。そのころ相原さんが、日本評論社から出た『日本経済統計集—明治・大正・昭和—』（1958年刊）を編さんするというのです。僕がフラフラしているところに、僕にも参加しないかという話があった。相原さんからよくそういう話を頼まれるのですが、僕も引き受けたわけですね。そのとき、僕に、「日本統計史年表」をつくってくれという注文だったのです。それじゃ、やろうかということ、編集会議に出たのです。そうしたら、日本評論社の鈴木三男吉さんが、ぐっどがんばっておられるんですね。ところが、僕は、鈴木三男吉さんには不義理をしていましたね。というのは、日本評論社の借金を踏み倒しちゃったのですよ。

それはどういういきさつかという、終戦直後生活に非常に困りまして、蔵書を古本屋に売っていたころ、東大に行った友人の鈴木鴻一郎君に、何か小遣いを稼げる方法はないかねとちょっと冗談半分にいったのです。そうしたら、「あるよ。いまイギリスの古典経済学の翻訳をずっと連続的にやることを計画している」というのです。そして、マカロックの『政治経済学原理』（原書名 John Ramsay McCulloch, Principles of Political Economy, 1825年初版）を持ち出しまして、「これなら君にも読めるだろう」というのです。彼は僕が英語に弱いことをよく知っているんですよ。手にとって見ると、なるほど非常にやさしいので、これなら僕にもできると思った。それで彼は印税の前借りをするのを、オレが頼んでやるというんですね。それが鈴木三男吉さんだった。戦前から僕も鈴木三男吉さんと顔見知りだったのですが、三男

吉氏も鈴木鴻一郎君の申し出を快く受けてくれまして、
 僕に月々1000円でしたか2000円でしたか、送ってくれて
 いたのです。
 ところが、マカロックをやさしいと思って読んでいっ
 たら、ラテン語の引用文が続々出てくるのです。それで
 非常に軽率なことをしたと思った。大体ああいう人の著
 作を翻訳しようとするのなら、その人の思想なり伝記な
 りを知っていてからでなければ、手をつけるべきでない
 です。それをうっかり引き受けたでしょう。ラテン語を
 だれか専門の人に頼んだら、せつかく生活費もらったっ
 て、みんなファイになってしまふ。これには弱ったです。
 そうしたら、幸か不幸か、発熱しまして、結核が再発し
 てしまったんですね。それで、病気が救いの主みたいなの
 ものですけれども、三男吉氏に手紙を書いて、こういう
 わけでできなくなったからと断ったわけです。けれども、
 僕が借金したのは当時のカネで1万円か2万円ですが、
 それを返せるわけがない。それはそのままです。ところが
 が、『経済統計集』の編集会議で、その不義理をした三男
 吉先生ががんばっていたんですよ。
 それで、今度また「日本統計史年表」で失敗したらた
 いへんだと思いましたね。そこで、この年表作りには少
 し新機軸を出してやれという考えで、年表の各事項ごと
 にその内容を入れ込むことにしたのです。そして、具体
 的に統計の発展がわかるように、古い文献からの引用文
 で、内容を盛り込むというやり方を考えた。その当時は、
 そうというのが案外なかつたらしいのです。僕は、統計局
 の仕事はある程度手を抜いて、この年表作りに力を注ぎ
 ました。統計局図書館の本を洗いざらい借り出してやっ

たわけです。もつとも、この「年表」にはずさんなところが、ずいぶんたくさんあるのですが、この仕事をして
 いるうちに、日本の統計が、どういう時期にどういう形で
 発展してきたか、わかってきたわけです。そして、そ
 こに明確な時代色があらわれる。この歴史的潮流を作っ
 ているものは一体何か。それを歴史的に証明してみよう
 というのが、僕が日本の統計調査の歴史を勉強するきっ
 かけなのです。ですから、初めから何かやろうというの
 ではなくて、全くの偶然です。しかも、三男吉氏に借金を
 踏み倒していたことが原因で、そうなったようなもの
 ですよ（笑）。

三瀨 日本統計研究所には、組織の中にお入りになった
 ことはないわけでしょう。

鮫島 僕は統計研究所には、相原さんを通して何とな
 く関与するようになりまして。相原さんがあの年表を
 見てからと思いますが、この研究所の名で毎年行政管理
 庁に提出するレポートとして、僕に「わが国の生産統計
 の発達」という論文の執筆をたのんでこられたことがあ
 ります。このときに初めて、物産表のような古資料をつ
 つき出したわけです。それが、日本統計史の研究をやり
 始めるきっかけになったのです。

三瀨 「日本統計史年表」を書かれてから（昭和33年）
 統計局内のいろいろな課をまわられました。その間に
 やがて筑摩書房の『統計日本経済』（統計学全集第28巻、
 1971年刊）をお書きになる蓄積をなさったわけですね。

鮫島 そうですね。それから雑誌『統計』にいろいろな原
 稿を頼まれたりして、そこで少しづつ蓄積していったこ
 とになりますね。

三瀨 いまになってみれば、鮫島先生はずっと統計にか
 かわっていらしたわけでしょう。

鮫島 これは偶然ですね。

三瀨 でも、やっぱりゼミと非常に……。

鮫島 しかし、ある関係はありますね。つまり、統計を
 使って社会の何かの現象を、実証的に勉強していこうと
 いうことはありますね。大学時代のことで、そのころは
 全然気がつかなかったのですけれども、僕のいまの仕事
 と関係があることを、実はやっていたのです。

大学の3年生のときに、東大で「小寺懸賞論文」とい
 うのがあつたのです。論文を提出しますと、40円とか50円
 80円、少しお金をもらえるのです。それは外国の文献を
 参考にして、論文をつくれというのが趣旨なのです。僕
 が3年生のときに、「歴史学派の方法論」というテーマが
 出ました。経済学部は卒業論文がないですから、1つぐ
 らい論文をつくってもいいだろうと思って、それに応募
 することにしました。

それは後から聞くと、土屋喬雄先生が出題したものら
 しくて、僕は有沢先生に、ヒルデブラントなんかの原書
 を夏休みにお借りして、読んだりしたことがありましたが、
 歴史学派の方法論は、そのころは日本語では何も文
 献がないのです。結局、ドイツ語が主ですけれども、わ
 からぬなりにやって書いたら、1等に当たる人が1人も
 いない。それで2等賞が2人で、そのうちの1人が僕に
 なりました。

歴史学派というのは、統計の上では例の国状学派です
 よ。ヒルデブラントとか、ロツシャーとか、カール・ク
 ニースとか、あの流れなのです。僕は、カール・クニ

スのむずかしいドイツ文を、大学の図書館で一生懸命読んだことをおぼえています。ところが5、6年してからこれはナケスの思想の原型になっていることに気づきました。それを書けば、土屋さんは僕に1等賞をくれたのじゃないかと思ったけれども、後の祭でした(笑)。

さらに、これは統計学と、出発点が同じなんです。アダム・ミュラーなんていうのを読みましたが、つまりスターツクンデなのです。ですから、大学生のときにやったことが、後で統計学の歴史とか、そういうものを理解する場合には、案外結びつきがあった。これも偶然なのですけれども、そういうことはありました。

三濑 高野岩三郎先生のものを気をつけてお読みになったことは……。

鮫島 それはありませんでした。戦争中に『古典選集』をみたことはありますが……。高野先生の論文をよく読むようになったのは、むしろ統計局に入ってからですよ。

森 じゃ、有沢先生の授業では、そういう話はなかったわけですね。

鮫島 はっきりおぼえていませんね。先生は、むしろ経済学者として僕らに対しておられたような気がしますね。

森 統計が絡んでいるとしても、現状分析のような形で絡んでいるのですね。

鮫島 だから、統計の使い方は見よう見まねでやりましたよ。演習のときから、そういうことは何となく手がけていました。それから、ずっとそういうことに関係のあるような仕事の分野を歩いてきたことは確かです。

三濑 有沢先生ご自身も統計をやるつもりじゃなくて、

糸井さんという方がドイツで亡くなったので、いってみれば無理やり統計をやらされたといつかお話を伺ったことがあるのです。

鮫島 先生ご自身は、やはり経済原論をされたかったのではないかと思います。僕が森田先生の名前を聞いたのは、有沢先生からなのです。昭和10年に、先生が『物価指数の理論と実際』という本を書かれましたね。あれは非常にいい本だから、読んだらいいとすすめられたのは有沢先生でした。そのとき、森田先生という人がおられるということを知ったわけです。そして、その本も買いました。だれかに貸してそのまま行方不明になりましたけれども、統計局にきて、物価指数を担当するようになってから、また古本で買いもとめました。

その森田先生と、偶然にも深いつながりができるようになったのです。ですから、僕の人生における人の触れ合いというのは、有沢先生と森田先生、相原茂、末永茂喜、こういう系列になるのです。

三瀨 蜷川先生、あるいは蜷川統計学は、有沢統計学の中では、ときどき顔を出しましたか。

鮫島 いや、全然出なかったように思います。ただ、僕も蜷川さんの本は読みました。

三瀨 それから履歴書に、統計調査官になられたと書いてあるのですけれども、それは課長を終わられて……。

鮫島 僕はなかなか結核が治らなくて、ときどき菌が出たりするものですから、調査官というあまり人と交渉のない仕事ならいいだろうと思って、当時局長だった小田原さんに頼んで調査官にしてもらったのです。

三瀨 それから今度、養成所にいらっしゃいますね。これは、後藤憲章さんの後ですか。

鮫島 松浦素さんという、後藤憲章さんの後を継がれた人の後に、僕が行ったのです。

三瀨 養成所はわりあい長くいらっしゃいましたね。ここで講義をなすった。

鮫島 講義もしました。

三瀨 それはどういふ……。

鮫島 あのころは、統計の歴史はやりました。それと、統計とは何かというようなイントロダクション的なこと。

僕がそこで心がけたことは、統計の実際と理論との接点のようなところをなるべく縫っていこうということをやったのですが、こっちの蓄積が少なく、あまりうまくいきませんでした。研修所に来る人は、みんな実務家系統の人ですから、実務をどういふふうに理論化するかということ、実は心がけたのです。

三瀨 筑摩書房の『統計日本経済』をお書きになったのは、養成所におられたときですか。あれは46年に出てい

るのです。けれども、原稿はもっと前に……。

鮫島 養成所にいたころだったです。

三瀨 このころのいきさつをちよつと……。

鮫島 筑摩書房の『経済学全集』の『統計日本経済』という巻は、最初は明治以来の長い時系列の統計資料を集めるというのが、編集上のねらいじゃなかったかと思うのです。そのうちに、まず日銀の、経済の長期時系列を集録した非常にいい労作が出ました。そして、日本統計

研究所のスタッフが、いろいろな事情があってやめたりして、その仕事がちょっと行き詰まってしまったのです。日銀と同じようなものを、日銀より質の悪い形で出してもしようがないだろうということで、相原さんもしばらく放置していました。けれども、筑摩書房からどうなったかとだんだん催促されるので、僕が昔、統計局の『研究彙報』に載せた「日本統計調査文献史」のコピーを相原さんに参考までに見せたのです。これなら僕もどうかままとめられるだろうと考えたんですね。相原氏に見せましたら、相原さんがこれで行こうじゃないかということになり、筑摩の編集部の人に相談したところ、それでいいですということ、それで僕が書くことになったのです。

しばらくの間、僕が相原さんとか、石川邦男君、泉俊衛君と一緒に研究会をやって、レクチャーをしていました。1年か2年やって、執筆を始めたわけですが、非常にっらかったですけれども、あれも偶然なのです。

三濤　しかし、いまや『統計日本経済』と、35年に東大出版会から出た『日本統計発達史』、この2つは、統計史の研究では欠くことのできないものですね。

鮫島　僕は、統計学者がサボっているのじゃないかという気がしましてね、その欠落部分を埋めるつもりでやったのです。

三濤　学史はあるけれども、調査史というものは、社会との関連でどうしても……。

鮫島　だから、統計局のようなところにいる方が、案外書きやすかったのかもしれないですね。

森　実態がわからないと、なかなか書けないものですね。

鮫島 ですから、そういうような仕事が、幸いにも僕の過去の経歴の中に、ずっと含まれていたようですね。

三濑 結局、『統計日本経済』の原稿は、どのくらいの期間で書かれたのですか。

鮫島 書き初めてから2年かそのぐらいはかかりましたかね。僕は遅いというか、神経質で、書きなぐりができない。ですから、きちんときちんと書いていくので、ずいぶん長くかかりました。日本統計協会に来て最初の年は、余暇のすべてをもっぱらそれに投入したのです。

三濑 43年から協会ですから。やっぱりあの本は、統計局にいらっしゃらなければ資料の利用などで、ちょっと書けないという感じですか。

鮫島 書けないですね。僕は、自分じゃ何も文献を持っていないのです。統計局の図書館にいますと、支部図書館の文献を借り出すことができるのです。だから、国会図書館の本を1ヶ月ほど借り出していることができます。それで非常に助かったですね。そういう地の利を得ていたことは確かだと思います。

三濑 石川邦男さんも統計研究所ですね。

鮫島 僕が知る前から、統計研究所に職員としていたのです。泉さんも。

統計研究所は、三濑先生もおられたことがあるのですか。

三濑 いや、ないのですけれども、あそこで相原さんと大内先生がシリーズを出していらしたときに、僕は相原さんからいわれて、『貸金』を1冊書いたことがあるのです。僕は、統計研究所にはいたことはないのです。いま統計研究所は、ご承知のように法政大学に包摂されて、

森さんもいま所員でしょう。

森 兼任所員です。現在は専任はだれもいません。

三瀧 喜多さんという人が所長になって、いま兼任は3人？

森 1982年の4月に、大学の附属研究所に組織がえしました。その前までは財団法人の扱いで、たしか鮫島先生も理事の名前の中に入っていたと思います。看板も、財団法人のままの看板が下がっています。

三瀧 組織的には、法政大学の一研究所。大原社会問題研究所と同じ？

森 大原社会問題研究所は、まだ財団法人です。

鮫島 大原社会問題研究所は、また別に法政大学の中にありますね。

森 そうですね。あれもちよっと複雑な形でして、大原とちよほど重なり合う形で社会労働センターがありまして、予算は社会労働センターに対して大学が100%出しているのです。『労働年鑑』をつくっていますから、若干の営業活動をやっています。

鮫島 『労働年鑑』は昔からつくっていましたね。

森 予算的には、ほとんど100%大学からの資産で維持されています。

7

三瀧 統計協会に移られてからの大きな仕事は、やっぱり雑誌『統計』でしょうか。

鮫島 統計協会の仕事は、むしろ経理ですよ。決算報告を書くことです。あれは嫌な仕事で、僕の最も苦手とするのをやった。あれを抜け出して守岡さんに譲ったので、

非常にのびのびしました(笑)。小さな組織でも、1銭違っても困るのだから。

雑誌『統計』は、初め僕が統計協会に来たときから、一応僕が編集者みただった。初めの1年間は、僕はあまりタッチしなかったです。従来どおり統計局のスタッフがやっていたのですが、1969年雑誌の組み方をタテ組みから横組みに変更したときから、僕が編集にみずからタッチすることになりました。

三濑 その前に、昭和20年代は加地さんの名前が後ろに出ていますね。

鮫島 加地さんは、昔から『統計集誌』にずっと関係していた方で、その延長で名が出ていたのでしょう。それから河原さんに移ったのじゃなかったかと思います。

守岡 加地さんは、編集を自分でしたというよりも、むしろ名義人としてのほうが多いのじゃないですか。一時統計委員会の方で北川豊氏(現埼玉大学教授)たちがやったでしょう。25年に編計局のスタッフが編集することになりました。それからは協会の方は名義だけで、実際の編集は統計局のそのころの若い連中が全部したのです。

三濑 どこかの部局でやったのですか。

守岡 じゃなくて、有志が合議制で。

鮫島 そのころは、大体森田先生が編集長のような形で、森田先生の指導のもとに、いまの永山局長とか、前に話した明石頌氏とか、いろいろな人たちがやっていたわけです。

三濑 いってみれば、有志が集まって。

鮫島 あのころは、みんなわりあい仕事を持っていますから、多少片手間にやらざるを得なかった事情がありました。

三瀨 雑誌『統計』が、毎号テーマを掲げるようになったのはいつごろですか。

鮫島 あれは、僕がやり始めてから1年か2年たってからですね。

三瀨 あれは、僕は毎号感心しているのだけれども、よく種切れにならないと思って。

鮫島 だんだん僕の知恵じゃ回り切らなくなってきましたね。

三瀨 決して同じテーマはないのでしよう、12カ月。

鮫島 でも、重ねることはありますよ。たとえば「統計教育」とか「読書」というのは重ねるけれども、見方を変えてやっています。重ねないとやり切れませんね。

1982年9月号で「宇宙」というテーマを出したでしよう。ああいうのは、僕の発想の中にはないのです。やはり若い人というか、わが編集部、宇都宮大学の犬友さんの発想なのです。どうしてもああいう新しい発想は、いまの若い働き盛りの人でないと出てこない……。

森 先月号1982年10月号でしたか、特集「漫画」はどちらの発想なのですか。

守岡 テーマ「現代人の読書を考える」の中ですね。

鮫島 集英社の『少年ジャンプ』とかいうえらく売れる本の編集長に書いてもらったのです。

三瀨 雑誌『統計』のねらいは、どのへんにあるのでしようか。

鮫島 あれは、むしろ啓蒙雑誌で、これから統計の仕事をやるとか、企画の仕事をやるとかいう人を読者層としています。だから、統計学者を相手にしているわけじゃなくて、まず府県の統計関係の職員とか企画部の職員、

それから統計学の専門の先生に見ていただいている部分もあるし、研究室に行っている場合もあるし、民間だったら、商社の企画、リサーチ関係の人たちが読者だろうと思うのです。ときどき電話していろんな話をしていると、「その雑誌知っています」なんていわれることがあります。

ですから、統計の普及宣伝という昔の東京統計協会時代の思想を、実はそのまま受け継いでいることになるのです。

三濑 「とみこうみ」は、もう何回分……。鮫島 あれは、そのうちまとめようかと思うものだから、数を数えてみると、いま166回になるかな。

守岡 十何年だから。

三濑 「とみこうみ」という言葉は、いまの若い人だったらちよつとわからないけれども。

鮫島 よく聞かれるのですよ。あれは、あっち見こっち見、『広辞苑』には「左見右見」と漢字が当ててありましたけれども。

三濑 「右顧左眄」とも違う。森さんは、「とみこうみ」なんていう言葉は……。

森 わかりませんね。何か、海の種類だろうと思っていました(笑)。

三濑 もし文章の中に入れるとすれば、「とみこうみしなから……」ということですか。

鮫島 ですから、あの中でいえば、あっち見たりこっち見たりしながら、話題を拾ってくるというようなことです。

三濑 あの中で、僕はやっぱりハッとおもしろいことが

しばしばあるのですけれども、あれは何か一定の観点を
 持って、題材をお考えになりますか。

鮫島 いや、ないですけれども、あれは結局、僕の人生
 の断片を書いているだけです。その場合に、もう一人の
 僕がいて、僕自身をモデルにしていることです。だから、
 僕がすべってころんだら、そのとおりに書かなきゃならぬ
 し、電車に乗っていて、きれいな女性のおしりにさわリ
 たくなつたと思ったら、それをそのまま書かなきゃいけ
 ない。だから、恥をかかないといけないのだ。そういう
 態度なのです。「私」というのが文章の主格なのだけれど
 も、それが私小説の主人公みたいに、それ自身をモデル
 にしていくという書き方じゃないですか。

三瀨 いろいろな内容がありますが、世評というか、時評
 という性格がわりあい強いと思うのです。

鮫島 そういう評論と、人生の断片と、私小説的な描写
 と、それらをミックスしたようなやり方です。ですから、
 僕があまり忙しいポストにいたら、ああいう文章は書け
 ないと思うのです。わずかな経験が60年なら60年たまっ
 ていまして、こいつはおもしろかったなと思うものが、
 心のどこかにひっかかっている、それがモチーフとして
 残っているわけです。しかし、そのモチーフ自体は、そ
 れだけでは文章にならないです。たとえば、非常な美人
 がバナナの皮を踏んづけて、すべってしりもちをついた。
 見ていて、ちょっとおもしろかった。しかし、それだけ
 では文章にならないですね。2、3行で終わっちゃいま
 す。そのモチーフに、テーマが結びつかなくちゃいけな
 い。だから、モチーフとテーマを結びつけて、ひとつの
 小さな世界をつくるわけです。そういうのが、あの文章

の態度といえるかもしれません。

モチーフというのは、何年も長い間しまっているわけです。そこに、何かふとした新しいものが新聞なんかで発表されたり、ある話を聞いたり、それが結びつくことがある。そうすると、ああいう文章になるわけです。

三濑 何かああいう文章の作家といますか、エッセイストというか、そういうきっかけみたいなのはありますか。

鮫島 僕は失業したり、病気になって入院したり、そういう時間がずいぶん多いのです。そういう時間というのは、そうおもしろおかしくやっているわけじゃなくて、むしろ非常に内省的に自分を見詰めたり、人間の心理を考へたりします。そういうことがもとになっていると思うのです。結局、文章なんてある意味じゃ不幸な話で、専門家で、専門的なことでいろいろ豊富な経験を積まれて、非常におもしろい随筆をつくる人はたくさんいますね。湯川さんだってそうだし、いろいろ大ぜいいます。僕のはそうじゃなくて、ひまがたくさんあったというこの中から生まれたものらしいですね。

三濑 ちょっと戻って恐縮なのですが、『資本論』は、大学生時代はもう発禁の書でしたか。

鮫島 いや、発禁の書ではなかったです。高等学校のときに、あのころは語学だけが受験科目なので、僕は、受験用の教科書はつまらんですから、エンゲルスの『反デューリング論』のドイツ語の本を読んだのです。しかし、高等学校では、あれはいけない本だったらしいです。昭和5年ごろです。正式にはいけないことになっていないけれども、あんな本を見ているやつは、にらまれたで

す。

三瀨 高等学校のときに、社会科学研究会はあったでしょうか。いってみれば、左翼ボーイでしたか。

鮫島 僕は、そういうのに加わらなかつたですね。けれども、左翼的だったかもしれません。

三瀨 また『資本論』ですけれども、『資本論』はどの時期に読まれましたか？

鮫島 大学生のときに読みました。僕は、あれは日本語で読んだ方がよかつたと思うのですが、原書で読んだのです。

三瀨 それは読書会のようなのですか。

鮫島 いや一人で。それは東大の図書館を利用して読んだのです。あそこは、本を置きっ放しでよかつたですし、みんな静かに勉強してましたから。僕もある程度は勉強したつもりだったのだけれども、実際は十分には理解しなかつたですね。

三瀨 『統計日本経済』も、相原先生も当然そうなのだけれども、いろんな説明、たとえば職業や産業の説明なんかは、いわゆるマル経の説明ですね。そういう点では、近経の方ではとてもあの本は書けないわけでした。相原先生と一緒にあれを書かれた。結局、石川氏と3人ですか。

鮫島 石川君と泉君。けれども、僕が大体8割程度書きました。

あそこで、産業・職業の関係についていいますと、戦後の国連の標準産業分類とか職業分類を見ますと、産業と職業の概念が違ふのだということ、非常にはっきり強調されているのです。そして産業は事業の種類だとか、

職業は仕事の種類であると規定する。これは言葉を置きかえただけで、理論的な説明にはなっていないと思うのです。杉亨二が「甲斐国現在人別調」で職業分類という概念を初めて打ち出しましたね。あれを解釈するとき、職業と産業はどこでつながっているかということを考えただけです。結局、それは、人間の経済活動を2つの側面から見たのにすぎないという観点から、杉亨二の「職業分類」の解釈（『統計日本経済』所収）を試みているわけです。

国連の分類は、いまどうなっているのか、勉強していないからわからないけれども、戦後の考え方は、確かに職業と産業が概念的にはっきり違うのだということを非常に強調してきたし、その考え方は浸透しましたが、どこで結びついているか、そこの理論は欠落していると思えますね。産業とは何かを改めて考えるとき、有沢先生の最初の「農業は産業である」という言葉を思い出すわけです。

三瀨 杉さんの話が出ましたけれども、職業を分類するとき、無業者、無職業も最後にくっついていきますでしょう。第1回の国調でも、第2回の国調でも、無職というものをつけていきますね。ところが「産業」が出てくるとあれも落とすしてしまう。職業と産業の人口が一致すべきだという形式主義がのさばると、無職は飛んでいってしまいますね。そうなってくれば、ひとつの社会に人間がどう生きているかということ、あらわさなくなってしまうですね。おっしゃるように、形式的には分けたようだけれども、実際に社会の実態を映すように分類がなっているのかどうかというのは、大きな疑問のように思いま

す。

三瀬 日本統計協会 100周年記念事業のことなのですからけれども、結局、4つですね。『年譜』と『抄智叢』と論文選集が2つ。あれでもう完結でしょう。

鮫島 あれで一応。この記念事業のための計画委員会のときには、もっと新しい時代のものをどうするかという議論にはなったのですけれども、実行はなかなかむずかしい点もあって、あれで完結することにしたのです。

三瀬 100周年だから当然歴史の回顧なのだけれども、それにしぼられる過程は、どういうことだったのでしょうか。『年譜』は、ある意味では……。

鮫島 あれは、どこからああいう発想になったのか、とにかく委員会のメンバーに伊大知良太郎さん、森谷喜一郎さん。伊大知さんと森谷さんは、『スタケステック雑誌』『統計集誌』とは古い時代からのつながりを持っていました。森田先生、新しいところで永山さんなどにも参加していただいて、『スタケステック雑誌』や『統計集誌』は、今は人目にふれない古文献になってしまったし、ここに掲載された記事・論文は日本人の統計的思考の展開を明確に伝えているから、という立場から、あの『論文選集』をつくろうということになったのです。ですから掲載論文の選定基準も日本人の統計的思考、統計的問題意識の展開を跡づけるという点におきました。

最後の『抄智叢』(杉亨二講義ノート)というのは、まず細谷新治さん(一橋大学)が紹介論文(抄智叢事始「書容」昭和51年7月、8月号)を書いたのです。それを森田先生が見つけまして、この一部を復刻することを提

案されたのです。

それまで、杉亨二の共立統計学校での統計学講義を筆記した横山雅男のノートが残っていて、それが一橋大学の図書館に所蔵されていたことを知らなかったのです。

三猪 藤本幸太郎さんからの寄贈。

鮫島 森田先生はあれを発見されまして、これは細谷先生にぜひこの横山ノート復刻版の解題を書いてもらおうということで、細谷先生のところに先生みずから出向かれて、じきじきに交渉されたのです。細谷先生も、それを引き受けられました。

あの横山ノートは日本統計協会と非常に関係が深いのです。横山雅男、杉亨二、藤本幸太郎先生、みんな関係があるものですから。それに日本の最初の統計学の講義録に相当している。実際には、それより以前に東京の大学で講義した人がいるかもしれないけれども、あまりはつきりした形では残っていないですから、あの企画になった。細谷先生が非常にこり屋で、徹底的に追究される方なので、『多智契』解題中の「杉先生小伝」は、新しい発掘を含む、たいへんおもしろい力作となりました。

三猪 やっぱり加地さんの本よりは、そういっちゃ悪いけど、ずっと信憑性が高いですね。あの別冊は、独立の本にもなり得ますね。

鮫島 あれは非常な労作だと思うのです。「統計」という言葉を、だれがスタティステックスのかわりに用いたかというのを突き詰めて、僕らわからなかったことを、あれは開成所の教授頭であった柳川春三という人物に違いないという推定まで持っていったわけですから、あれは非常に貴重だと思うのです。

三瀨 一方、守岡さんがやられた統計局の百年史と、内容的には大いに連動しているのだけれども、協会の仕事ではないわけでしょう。あれは統計局プロパーの。守岡 あれは、局プロパーです。

三瀨 ちょっと角度の違う話ですけれども、戦後、統計委員会ができて、いまのように変わってきましたね。統計局にずっといらして、そっちのサイドからああいうのを見ていらして、さっきもちょっと出ましたけれども、やはり日本は調整機能としての統計委員会制度で、中央統計局構想じゃなくて来たのですけれども、統計委員会なり、後の統計基準局をどういうふうにごらんになりますか。

鮫島 僕は、あの調整機能は統計局とは別の機関が持っている方がいいと思うのです。いまの行政管理庁はちょっと力が弱過ぎて、調整機能がないかもしれませんけれども、統計局の中に入れてしまうことには、僕自身の考え方としてはあまり賛成ではないです。統計局自体が、一つの統計の実務機関ですから、それと調整機能をダブらせてしまうのは、理論的にすっきりしない点が出てくると思うのです。

三瀨 企画庁に持っていこうかとか、そういう議論も出たことがありますね。

鮫島 企画庁に一時入ったことがありますね。各省それぞれあるのですけれども、一般目的的な家計調査とか、物価指数とか、人口とか、こういうものは、やはり中立的な機関が持っている方がいいのじゃないかと思えます。いまはどこでも、たとえば農林水産省の統計情報部、そ

ういう大きな機関は中立性を持っていてるべきだし、そう
 いう発想で部局を大きくしたわけですね。
 ですから、今度の行政改革案でも、企画庁に調整機関
 をおく考えが一部出ているらしいですね。そうでない方
 がいいのじゃないのか。実際やってみると、あまり変わ
 りはないのかもしれませんけれども。
 三瀬 統計局と統計委員会とが内閣の中で衝突なんかし
 たことは、あまりないのでしょうか。
 鮫島 それはありますよ。しょっちゅうやっていますよ。
 守岡 僕もよく知らないのですが、戦後でしたら
 簡単にいつて、統計委員会ができて、統計委員会の代表
 として森田先生が統計局に来られたわけでしょう。川島
 前局長の意見は否決になったから、退かれて、森田先生
 が来られたわけですね。同時にいろいろなことがあって、古
 い代表的な方は、みんなさがられたのです。ですから、
 統計委員会と機能を調整して、統計局は、技術官庁とか
 実施官庁という分担は承認して、その中でもっと大きく
 なりたいとか、正式にはそういう考え方なのじゃないで
 すか。
 そうしますと、たとえば各省との関係では、基本的な
 センサス類は統計局がやった方がいいのではないかと
 そういう考えが24、25年のころあったわけですね。だから、
 あのころ逆に、統計局自身を、統計委員会とは別に外局
 にしたいという考え方を出していますね。たとえば統計
 局に、国会図書館の分館があるでしょう。あれは内局に
 つくというのは、おかしいのじゃないですか、本来。ほ
 かを見れば、各省で1つとか、外局にあるとか。だから、
 要するに実施機関の中心として、少なくとも外局にする

という方針でやったことがある名残りじゃないかと、僕は思うのです。

それは別にしまして、いまおっしゃった統計基準局とは、この仕事は調整官庁に置くべきか実施官庁におくべきかというようなことでいろいろ仕事の引張り合いがあったのじゃないでしょうか。

三瀧 統計委員会が、本来、各省庁の調整機関としてあるでしょう。統計も、統計の一実施機関ですね。そうすると、各省の統計部と統計局は、そういう意味では同格……。

守岡 並列なわけですね。そこで、昔からの経験がありまして、技術的実績があるから、そのころの話で、集計は集中してやった方が能率的ではないか否かとか、個々の、あるいは毎月の業務的なものではなくて、基本的なセンサス類は統一的に業務をやったらいんじゃないかとか、こういう問題があった。それを統計委員会が調整するわけですね。その場合に、統計委員会と統計局が同じ意見で、各省がそれに反対とか、逆に、統計委員会と各省が同じ意見で、局が反対とか、そういう問題はいろいろあったのじゃないでしょうか。

各省を抜かした問題でも、たとえば統計局と統計委員会と、ある仕事をどっちがするかということも、議論としては問題になりますね。

三瀧 移管の問題では、人口動態が厚生省に移ったでしょう。それ以外には……。

守岡 労働省に毎勤（毎月勤労統計調査）が行きました。

三瀧 これも、やはり森田局長がすんなりのんだ。

鮫島 そうですね、森田局長のときです。

三瀬 大きな移管は、その2つですね。

森 外から来たのもありますか。

守岡 来たのは、小さいのはあります。個人企業統計調査とか、科学技術研究調査とか。

三瀬 個人企業は、企画庁から来たのでしたか。

守岡 そうでしたね。

鮫島 科学技術は、どこでやっていましたか。

守岡 いまの科学技術庁の前身で、委員会みたいなのがあったのです。そこでやっていたのが来たのです。

三瀬 やっぱり毎勤と人口動態が行くというのは、官庁では相当大きな変革ですね。

鮫島 あれは、非常に大きな決断ですね。毎勤の方は倉持博さんという人が課長をやっているときです。

三瀬 局内では、ワンワン反対が出たでしょう。

鮫島 下にいるのは、おこったりしていましたがけれども、やったわけですよ。あのころだからできたのかもしれないね。一種の変革時代でしたから。

守岡 人口動態は、統計局も統計委員会もみんな反対したわけですね。これは司令部の意向だったわけでしょう。

三瀬 毎勤もそうですか。

守岡 毎勤は、司令部ではなく、労働省自体の考えを委員会も統計局も認めたということでしょう。

鮫島 あのと、倉持君が課長で、倉持君は反対の意見はちっとも述べていませんでした。毎勤を労働省にやったところで、統計局としては損することは別はないのだというので、課員を説得していたみたいでしたね。

三瀬 官僚組織としては、仕事が減るということは、予算が減るといふ大きなマイナスですから。

鮫島 とても嫌なのです。その責任者のポストに立って、非常に勇気を要することです。

三濑 戦後一時期、学者先生が統計部局の長になりましたね。正木さんとか、近藤先生、森田先生。ああいう時期はもう過ぎてしまって、いまは……。

鮫島 いまはまた平穏無事な行政官。

三濑 ですから、統計報告調整法なんかができただけでも、やっぱり行政優位ですね。行政の必要によって統計はつくられるのだから、しようがないといえはしようがないけれども、統計プロパーの調整機能は非常に弱くなった。

鮫島 調整機能は、たとえば統計局側に立てば、機能が強いために困ることが起こり得るだろうけれども、本当は強くなければいけないですね。

三濑 行政委員会じゃないと、審議会では無理なのでしようね。

鮫島 審議会じゃダメですね。そういうことにはおそろくならないだろうと思いますけれども。

三濑 予算権でも持たなきゃ。

森 歴史としての現代というわけでもありませんけれども、『統計日本経済』を書かれた鮫島先生として、戦後30年の統計の動きを統計史として見た場合、何か目に映るようなものはございますか。

鮫島 いま非常に矛盾にぶつかって、なかなか動きがとれなくなりつつあるということじゃないですか。統計の質は悪くなる傾向があるけれども、コンピューターはどこまでも計算できるのだから、個々のデータは非常に変わってこな、質の悪いものをわれわれは食わされるおそれがある

ある。そういうことになりつつあるのじゃないですか。

森 処理能力と、インプットするデータの質が違うという
ことですね。

鮫島 いま、統計情報を集める方法としては、統計の質
がよくなる可能性があまりないのです。悪くなる可能性
はあっても、しかし、それを集計するところは、コンピ
ューター仕掛けで非常に精密に、どうにでもできるわけ
でしょう。ちゃんとピタッと計算できるのだから。個々
の数字は、場合によっては非常に当てにならないものが
山のようにあるのじゃないのかという気がします。

三瀬 加工技術が発展し過ぎたのでしょうかね。

鮫島 そういう情報処理のテクニック、コンピュータシ
ステムはますます進歩する。情報を生産するところは人
間の意志を過ぎざるを得ないから、なかなかそうよくな
らないですよ。将来、統計教育が非常にうまくいって、
国民が統計調査というものに全部協力してくれるという
体制ができれば、別かもしれません。ですから、だんだ
ん欧米的な感覚になっていけば、統計が生産される部面
ではラフになると思うのです。しかし、それを加工する
面では精緻になる。そのギャップが大きくなりつつある
のじゃないでしょうか。

コンピューターの間違いは、5、6年たってやっと発
見されてみたりしますし。

三瀬 統計調査がだんだんやりにくくなるのだったら、
いっそ業務統計の再開発ということが……。

鮫島 戦後は、業務統計をバカにしていたのですね。推
計学が科学的だということになった。しかし、業務統計
でなければできない情報だってありますよ。

三瀬 業務統計というのは、一種のセンサスみたいなものですね。

鮫島 センサスですね。業務統計そのものを見直す。その編集の仕方。あれを詳しく見ていったら、ずいぶんいろんな問題点が出てくると思うのです。だれもやらないし、大変だからやれませんけれども。

三瀬 業務統計というのは、どうしても利用者から見にくいということがありますね。プロしかわからない言葉でやっちゃうから。

森 業務統計にも一種のクセのようなものがあるようですね。1週間ぐらい前、警察統計で逮捕率を上げるために、事件の発生件数を過小評価していたということがバクロされていきました。

鮫島 警察統計というのは、本当に見方がむずかしいですよ。警察が努力すると、数字が変わってきますから。

業務統計そのものを見直す必要があるのですけれども、業務統計について、統計学の専門家はさっぱり触れませんね。

三瀬 結局、一次統計中心で。

鮫島 あれは、もっと探求していい問題が含まれていると思うのです。

三瀬 上杉正一郎さんが、業務統計の類別をなさいましたけれども、4つのタイプがある。要するに、国と国民と、官庁同士の上下関係——いまの犯罪統計、それから独占企業と国、国営企業と国。そういうパターンはできたのだけれども、個々の業務統計についての吟味は、かなりプロでないといけない面もあるのですね。

森 業務に直接タッチしていないとわからないところが、

かなりあるのじゃないですか。

三瀧 金融統計ひとつ読むにも、あるいは国際収支を読むにも、やはりテクニカルタームを知らないといけない。しかし、やらなきゃいけないことだと思います。

それと、さっきもちょっと触れられた典型調査の再評価とでもいいましょうか、ランダムでなければいけないというのが、一時あったけれども。

鮫島 典型調査というものも、やはり考えていいのじゃないか。あれをどう理論づけるかというのは、むずかしい問題かもしれないけれども。

三瀧 中国の統計関係のパンフレットですけれども、統計調査にどういうのがあるかという説明に、センサスと典型調査と、ランダムサンプリングの3つを挙げていますね。やはり「典型調査」という言葉でした。

それじゃ、どうも長い時間ありがとうございました。